

溶連菌感染症

冬は感染症にかかりやすい季節ではありますが、温かい春も、実は様々な感染症が流行しやすい時期です。溶連菌感染症もその一つで、春から夏にかけて気を付けたい喉の感染症です。

溶連菌感染症の原因菌はA群β溶血性レンサ球菌と言われ、特に5歳から15歳までの子供がかかりやすい細菌です。

この菌が、誰かのくしゃみや唾などから飛沫感染したり、手についた菌が口から入って経口感染したりすることによって感染します。

集団で空間を共にすることが多い学校や会社では要注意すべき感染症です。

これから人との交流が増える機会も多い時期と思います。

予防方法や対処方法について知識を深め、健康に暮らしませんか？

○溶連菌感染症の症状

2～5日の潜伏期間（症状が出ない期間）を経てから症状が出始めます。

主な症状は風邪と非常によく似ていて、38度程度の発熱、のどの痛み、吐き気などです。

- 1) **発熱**：一般的に、風邪よりも溶連菌感染症の方が高熱になることが多く、39℃近くなることが多いです。
- 2) **のどの発赤**：溶連菌ののどの痛みはかなり激しく、口の中を覗くとどのちんこの辺りに紅いプツプツとした小さな発疹が現れています。
- 3) **咳や鼻水**：溶連菌の症状にはあまり見られません。
- 4) **いちご舌や発疹**：発症した後くらいから、舌の上につぶつぶとした赤い突起物が沢山発生します。発疹が口内や全身にたくさん現れることも特徴的です。

このように風邪と見分けるポイントはいくつかありますが、1～3については判断がしづらいですよね。原因不明の発熱が始まり、のどの発赤を確認した時点でできるだけ早く病院へ行き、のどの検査を行いましょう。溶連菌の感染の有無が明らかになります。

○治療薬

溶連菌にはペニシリン系の抗生物質が基本になりますが、セフェム系の抗生物質が使用される場合もあります。さらに、ペニシリン系やセフェム系の薬に対してアレルギーがある場合にはマクロライド系の抗生物質が使用されます。

溶連菌の治療に使う代表的な薬をご紹介します。

基本的に、大人も子供も、1日3～4回、食後に服用します。

用量は、年齢や症状、体重によって違います。

○予防方法

溶連菌感染症の予防接種はありません。溶連菌は飛沫感染しますので手洗い・うがいを徹底して感染を予防することは、他の感染症の予防と同じです。飛沫感染の予防には、マスクも有効です。溶連菌付着した食品やコップから感染してしまうことがあるので、家族が溶連菌感染症にかかってしまった場合には、感染した家族と食器を共有しないように気をつけましょう。

◎家庭でできること、注意をしたいことは、次の4点です。

- ・十分に水分を補給して下さい。
- ・のどの強い痛みがあることが多いので、お子さんが食べられるような、のどごしがよい、消化しやすい食べものを用意してあげてください。食べづらそうでしたら、水分だけでもたっぷり摂れるように心がけましょう。
- ・熱が下がってきたときは、お風呂に入っても大丈夫ですが、長湯にならないように。発疹が出ている間は、温めるとかゆみが強くなってしまいますので、温めすぎないように注意してください。
- ・肌を傷つけないように、爪を短めに切ってあげることが大切です。

○お願いしたいこと

抗生物質を服用することによって、発熱や発疹、のどの痛みなどはすみやかに治ることが多いです。ただし、目に見える症状が治ったからといって、油断は禁物です。体内にいる溶連菌を除菌するため、医師から処方された抗生物質の量や回数をお守りください。

溶連菌感染症が完治する前に、自己判断で薬の服用をやめてしまったり、回数を減らしてしまったりすると、発熱から2~3週間後に、急性腎炎やリウマチ熱、血管性紫斑病などの合併症を引き起こし、別の疾患としての治療が長引く恐れもあります。体が元気になってきたあとも、しっかり最後まで治療薬を服用するようにしてくださいね。

○まとめ

溶連菌感染症の特徴（ポイント）は3つです。

●症状の始まりは38~39度の熱と、のどの痛み、嘔吐から。

風邪と症状が似ています。

●溶連菌は別の大きな病気（合併症）の原因になりやすい細菌です。

溶連菌を完全に退治するまで、10日間~2週間ほど抗生物質を飲み続ける必要があります。

●完治したかどうかは、発症時の症状が改善した2~3週間後に検査してわかります。症状がおさまったからといって油断は大敵です！自己判断ではなく、きちんと医師の診察を受けましょう。